

第1章 四條畷市の概要

1 自然的・地理的環境

(1) 本市の位置

本市は大阪府の東北部に位置し、北河内地域に属しています。市域は東西約 7.3km、南北約 5.4km、総面積 18.69 km²で、北は交野市と寝屋川市、南は大東市、東は奈良県生駒市と接しています。また、南北に伸びる生駒山地が市域の3分の2を占め、そのほとんどは金剛生駒紀泉国定公園に指定されている緑豊かなまちです。



図 1-1 四條畷市の位置

(2) 地形・地質・水系

①地形・地質

本市は、生駒山地西麓の「西部地域」と東麓の「東部地域」によって地形・地質が異なります。西部地域は、生駒断層の逆断層によって急傾斜となり、そこから流れる中・小河川によって扇状地性の段丘が広がっています。また、地質は段丘堆積物と後背湿地が分布しています。一方、東部地域は、緩傾斜の丘陵が続き、盆地となっています。また、地質は大阪層群の田辺累層が分布しています。

なお、生駒山地は硬質の花崗岩が分布しており、標高は概ね 300m前後、最高地点は 361mです。その一部に大東市とまたがって標高 314mの飯盛山が所在します。

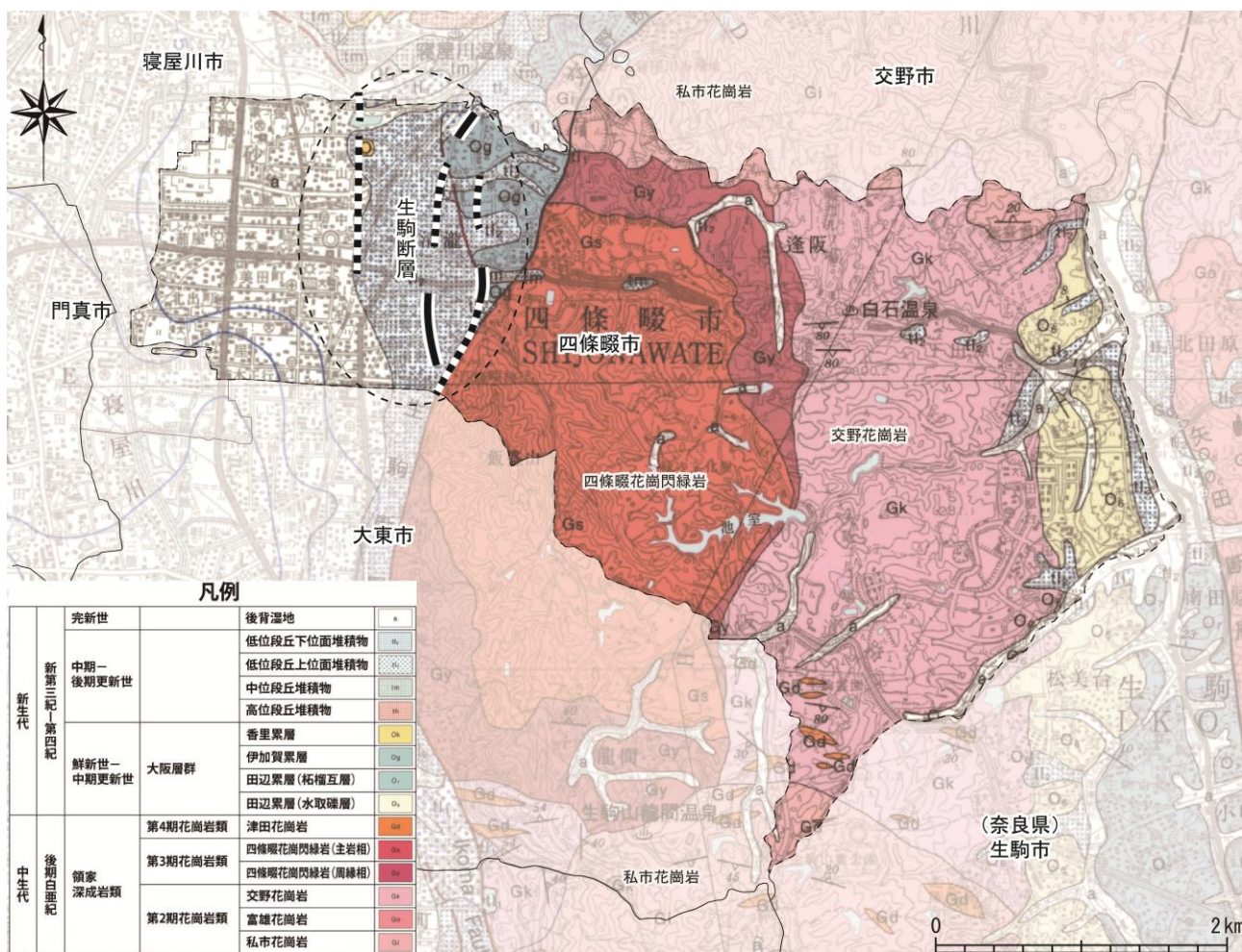
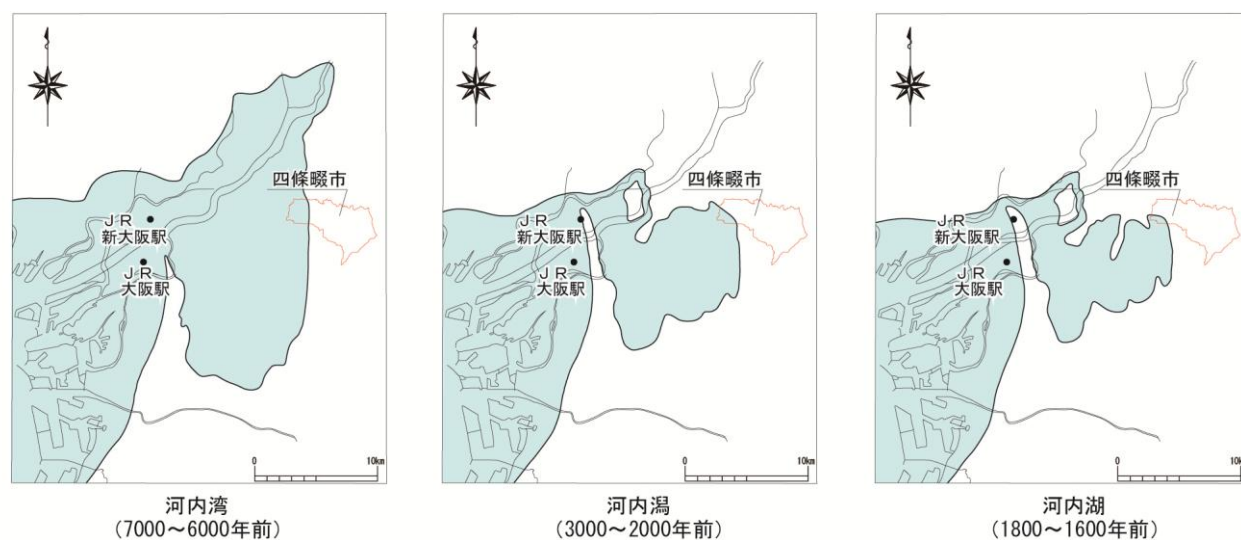


図 1-2 四條畷市の地質（地質調査所〔現 産総研 地質調査総合センター〕5万分の1地質図幅「大阪東北部」〔2001〕に加筆/四條畷市防災マップ）

②水系

西部地域は、生駒山地を源流として北から讃良川、清滝川、権現川が西流し、いずれも寝屋川に注いでいます。東部地域は、同じく生駒山地を源流として北から寒谷川、戎川、北谷川が東流し、いずれも天野川に注いでいます。また、生駒山地中腹に室池などの人工池が多数あります。

なお、西部地域に広がる平野部は、かつて縄文海進によって形成された河内湾として、瀬戸内海と通じていました。河内湾は、土砂流入により次第に河内潟、河内湖、深野池と水域を縮小させ、低湿地となり、現在は市街地となっています。



（3）気候

本市は、年間を通じて温暖で降水量の少ない「瀬戸内海式気候」に属します。この気候は、歴史的な文化財の維持・存続には比較的適した環境ですが、近年多く発生している豪雨や、それに関連する土砂災害などについては、文化財の防災対策上、留意すべき点となっています。

(4) 動物・植物

本市は生駒山地を中心として森林や室池などの水辺が豊富なため、様々な生態系が確認されています。

『むろいけの自然』（NPO 法人里山サロン、平成 28 年（2016）刊行）によると、室池周辺では大阪府レッドリスト 2014 に載るホンドキツネ（絶滅危惧Ⅰ類）やコサメビタキ（絶滅危惧Ⅱ類）、ヤマトサンショウウオ（絶滅危惧Ⅰ類、カスミサンショウウオとして）などの希少種が確認されています。しかし、イノシシなどの有害鳥獣も生息域が拡大し、日本全国で様々な被害をもたらしていることから、文化財を適切に保護する必要があります。



図 1-5 ヤマトサンショウウオ（下田原）

また、生駒山地に生育している森林の大部分はクヌギやコナラなどからなる天然林が主体であり、スギやヒノキなどの人工林は沢筋など一部の地域に限定されています。しかし、農林業センサス 2020 によると、四條畷市の林業経営体は 0 件であることから、台風などの強風による倒木、土砂災害などに留意する必要があります。

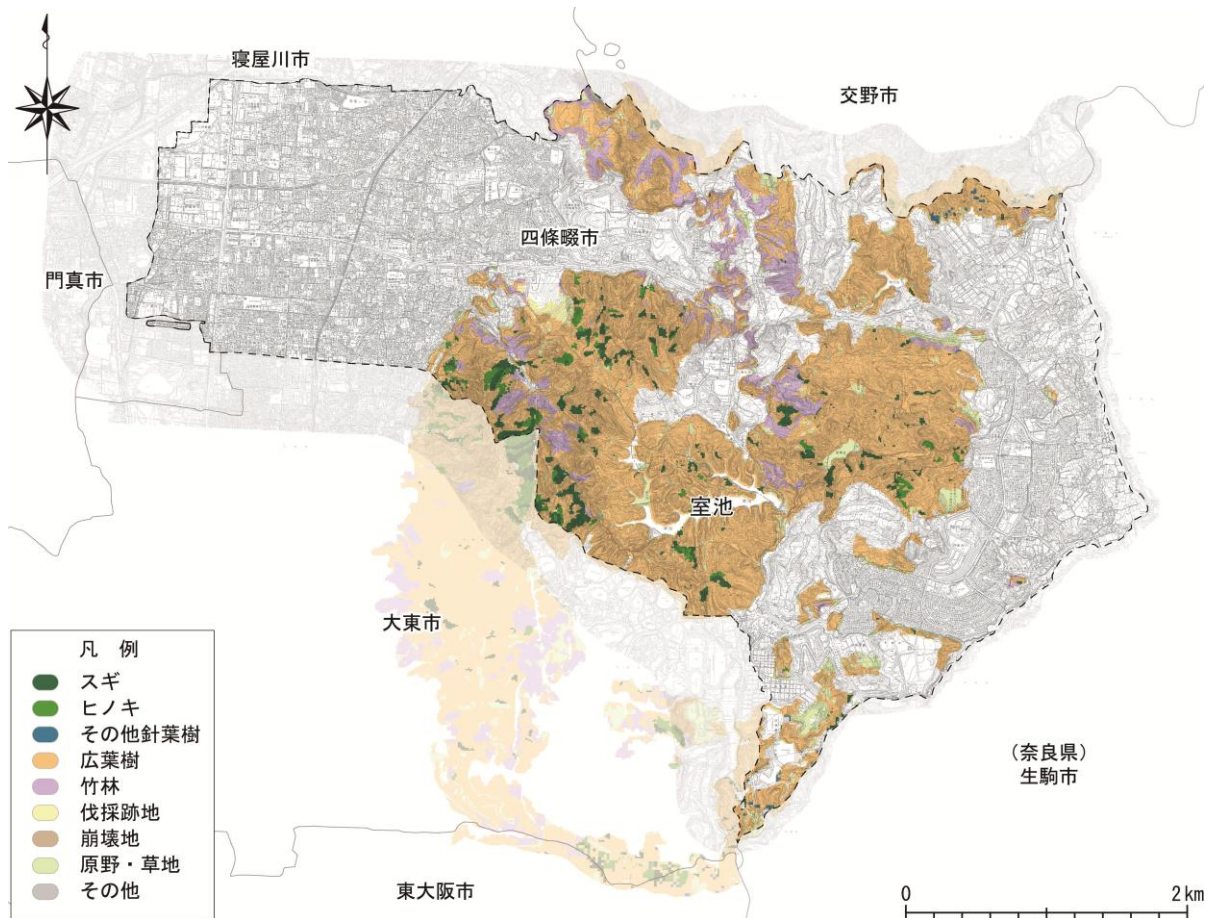


図 1-6 四條畷市の林層区分図
（大阪府森林資源解析調査〔令和 2 年度〕に加筆）

2 社会的状況

(1) 本市の成り立ち

明治 22 年（1889）の町村制により、南野村、逢阪村、清滝村、中野村、蔀屋村、岡山村、砂村が讃良郡甲可村となり、上田原村、下田原村が田原村となりました。現在の本市のうち、甲可村は西部地域、田原村は東部地域にあたります。その後、明治 31 年（1898）に、それぞれ北河内郡甲可村、田原村となり、昭和 7 年（1932）に甲可村は四條畷村に改称、昭和 22 年（1947）の町制施行に伴い、四條畷町となり、昭和 36 年（1961）に田原村と合併しました。昭和 45 年（1970）の市制施行により、現在の四條畷市が誕生しました。

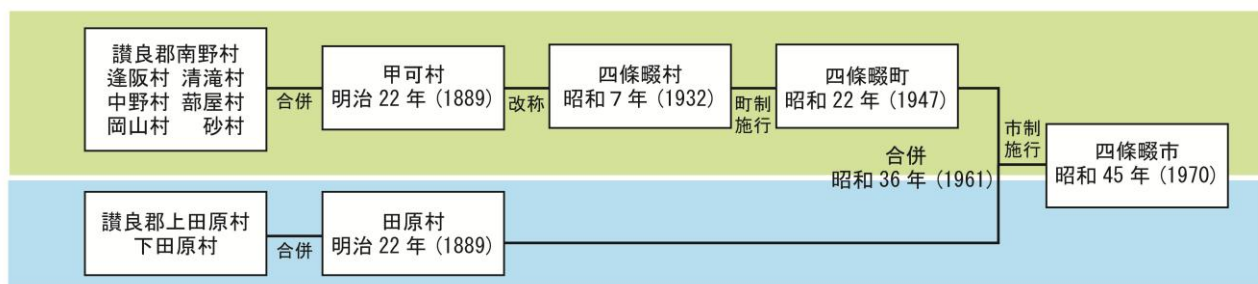


図 1-7 四條畷市の成り立ち

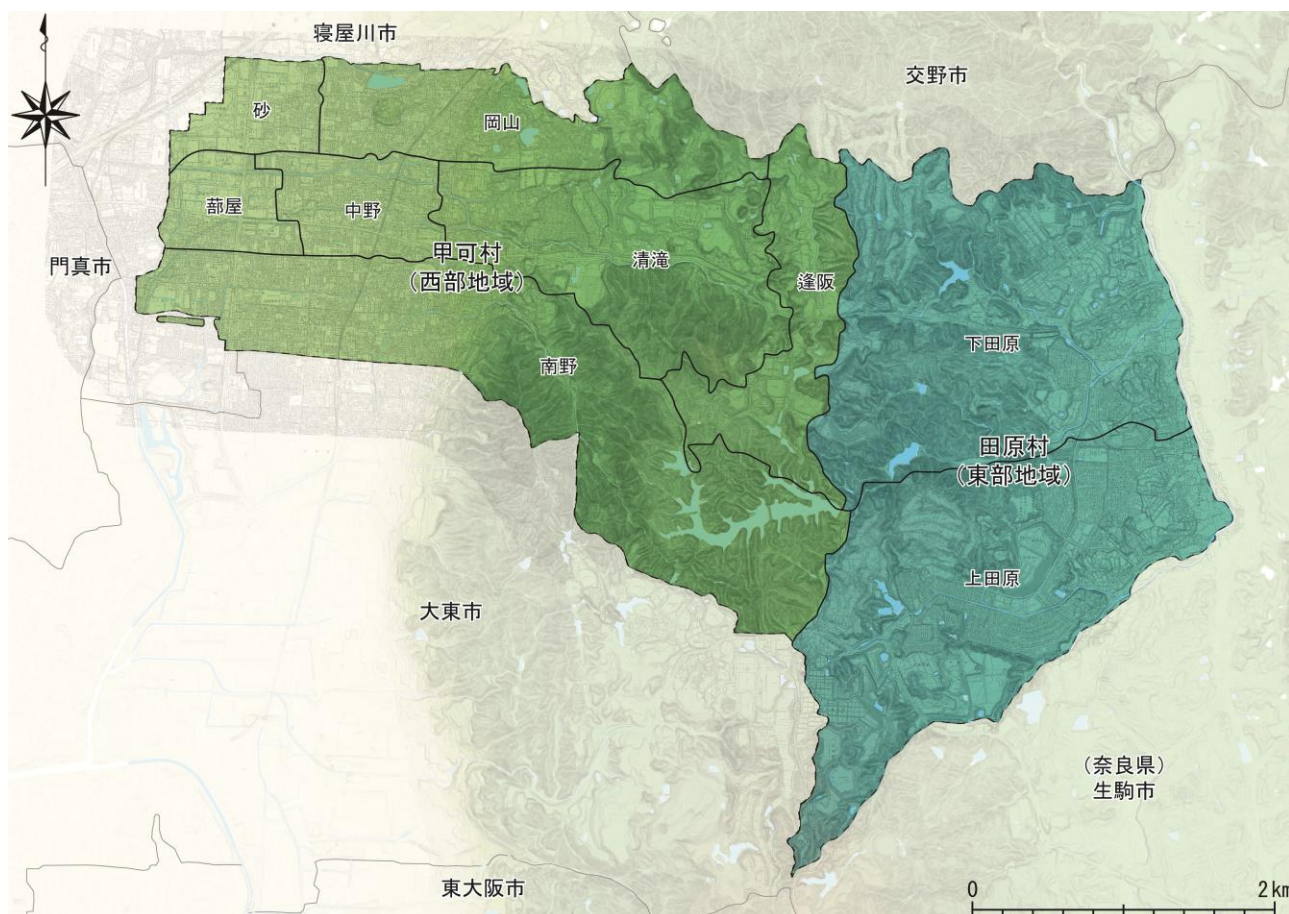


図 1-8 四條畷市の旧村構成図（四條畷市都市計画マスタープラン（平成 29 年 3 月改定）を基に作成）

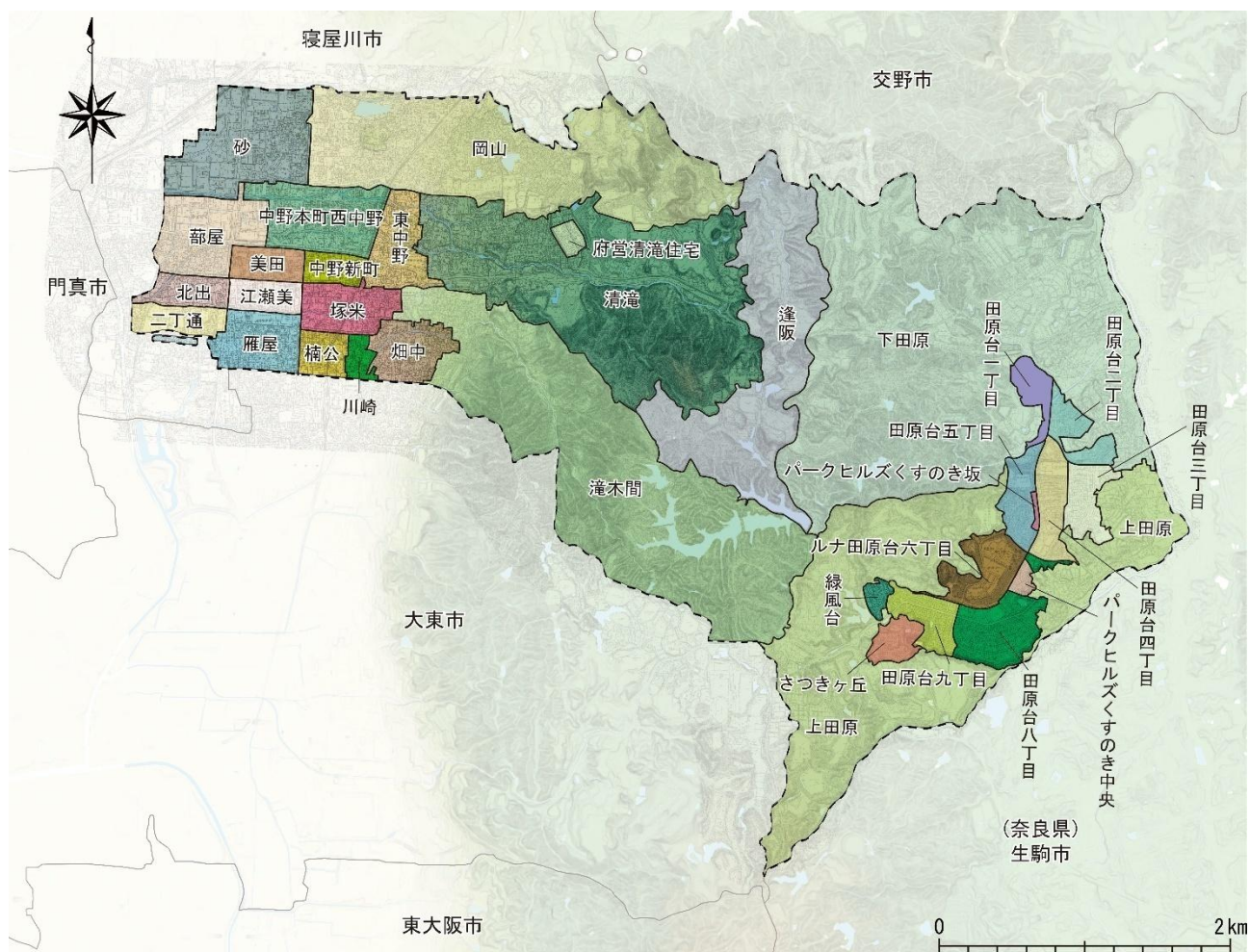


図 1-9 四條畷市の地区（『四條畷市史』第六巻（民俗編）に加筆）

（２）交通網

本市の公共交通網は、西部地域と東部地域で異なります。西部地域は、西部のほぼ中央部を南北に走る JR 片町線（学研都市線）が主要な公共交通機関であり、市域内の JR 忍ヶ丘駅と市域南部に近接している JR 四條畷駅が主要鉄道駅です。忍ヶ丘駅から大阪駅まで約 30 分、乗り換え 1 回で新大阪駅まで約 30 分のため、都心からのアクセスが良く、通勤通学だけにとどまらず、出張や帰省に適しています。また、近鉄バスや京阪バスなどの路線バスも運行しており、西部地域だけでなく近隣市にある京阪本線の寝屋川市駅や大和田駅などへもアクセス可能です。一方で、東部地域は、奈良交通の路線バスと市域東部に近接している近鉄奈良線が主要な公共交通機関であり、近鉄生駒駅が主要鉄道駅です。また、東部地域内の移動を便利かつ快適にするため、自動運転に関する実証実験やカフェミーティングを通して決定した自動運転車両「たわらコネクトカート（TCC）」（運行日：毎週水曜日及び第 3 土曜

日)) も運行しています。なお、本市が運営するコミュニティバスは西部地域と東部地域を繋いでいます。

本市の道路は、西部地域を南北に国道 170 号(大阪外環状線)及び府道枚方富田林泉佐野線、西部地域と東部地域を結ぶように東西に国道 163 号が伸びています。また、府道大阪生駒線(阪奈道路)、府道四條畷停車場線、府道中垣内南田原線や市域の北西に国道 1 号(第二京阪道路)などが近隣他市と連絡し、京都府や奈良県などに車で約 40 分とアクセスがいいのが特徴です。一方、主要道路以外は、幅員の狭い道路が多く、古くから重要な街道として様々な役割を果たしてきました。



図 1-10 四條畷市の鉄道と主要道路
(四條畷市都市計画マスタープラン(平成 29 年 3 月改定)を基に作成)

【コラム】市のキャラクター

くっすん



四條畷に住む「くすの木の妖精」(600 歳)。くすの木だけど、竹を割ったような性格。平成 20 年 10 月に、地域の活性化をするために誕生し、全国に知ってもらうため日々活動中。

なわ丸



四條畷市 PR 大使・谷口智則さんがデザインした四條畷市のキャラクター。四條畷市指定文化財である馬形埴輪がモチーフ。



図 1-11 四條畷市のバス路線図

(全国バスマップを参考に四條畷市都市計画マスタープラン(平成 29 年 3 月改定)を基に作成)



図 1-12 JR 忍ヶ丘駅



図 1-13 むろいけ園地



図 1-14 飯盛山

(3) 観光

本市は、前述したとおり交通アクセスがよいため利便性が高いにもかかわらず、豊かな自然環境が楽しめることから、市内外から多くの方で賑わっています。特に、金剛生駒紀泉国定公園内の「府民の森 むろいけ園地」は自然の中での遊び場、ハイキングスポットとして親子連れをはじめ多くの人で賑わっています。また、飯盛城跡が令和 3 年(2021) 10 月に国史跡に指定されたことを契機に、飯盛山への登山に市外から多くの人を訪れるようになりました。

(4) 人口

本市の人口は、平成 22 年（2010）の 57,544 人をピークに減少に転じており、令和 9 年（2027）3 月末時点で男 00,000 人、女 00,000 人、合計 00,000 人で、総世帯数は 00,000 世帯です。

また、四條畷市人口ビジョンにおいて、今後もすべての世代で人口の減少傾向が見込まれており、令和 32 年（2050）の将来人口は「人口規模 4.5 万人程度、生産年齢人口比率概ね 50%以上」をめざしています。なお、東部地域にある田原地区は、ニュータウンの開発から 30 年が経過し、住民の高齢化が危惧されています。

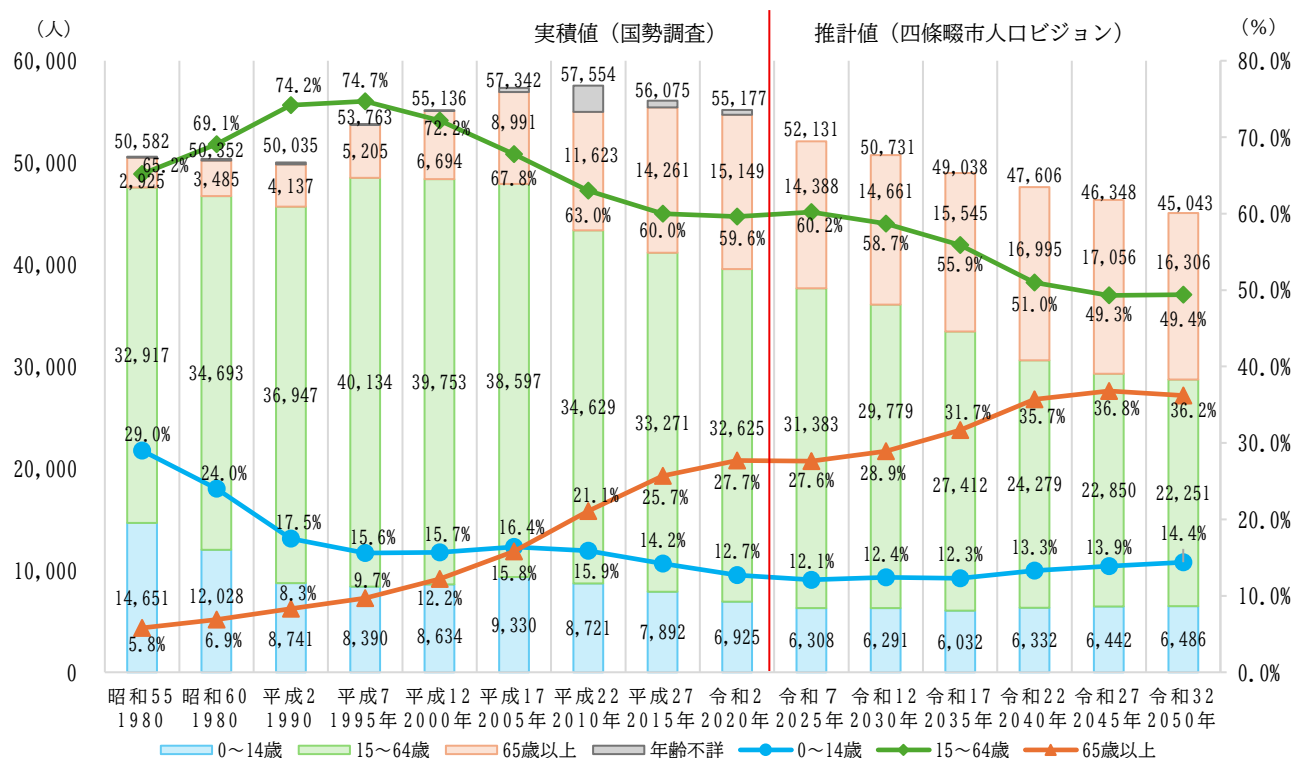


図 1-15 四條畷市の人口推移（実績値は令和 2（2020）年国勢調査、推計値は四條畷市人口ビジョンの目標値）
（四條畷市人口ビジョン（令和 5 年 3 月改訂）を基に作成）

(5) 土地利用

本市の土地利用は、平成 22 年（2010）時点をみると、山林等が約 40%、市街地が 30%、公園・緑地や運動場、学校・社寺等の普通緑地が約 12%。農地が約 6 %となっています。土地利用は、生駒山地を中心として、西部地域、東部地域に向かって傾斜地に市街地が広がっているのが特徴です。

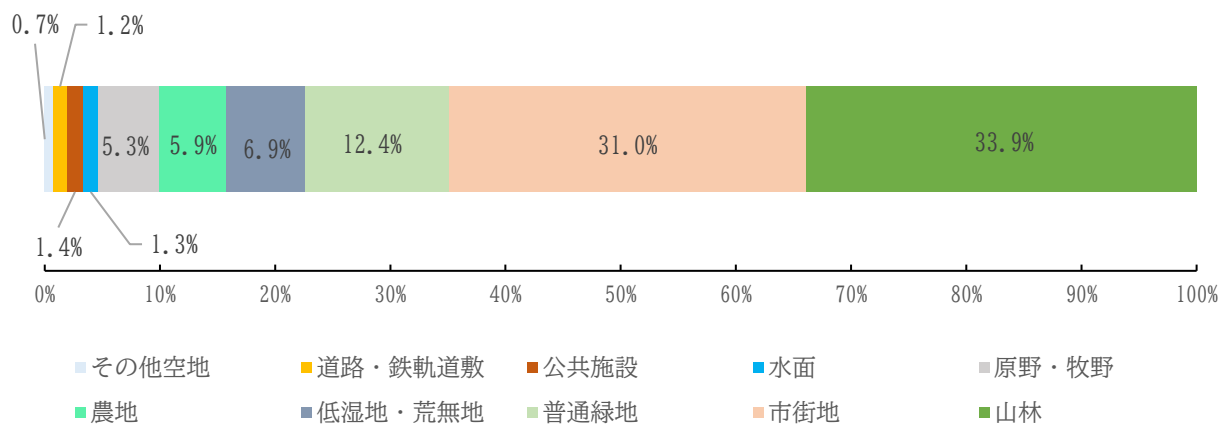


図 1-16 四條畷市の土地利用（令和 2 年度）（資料：都市計画法第 6 条基礎調査）

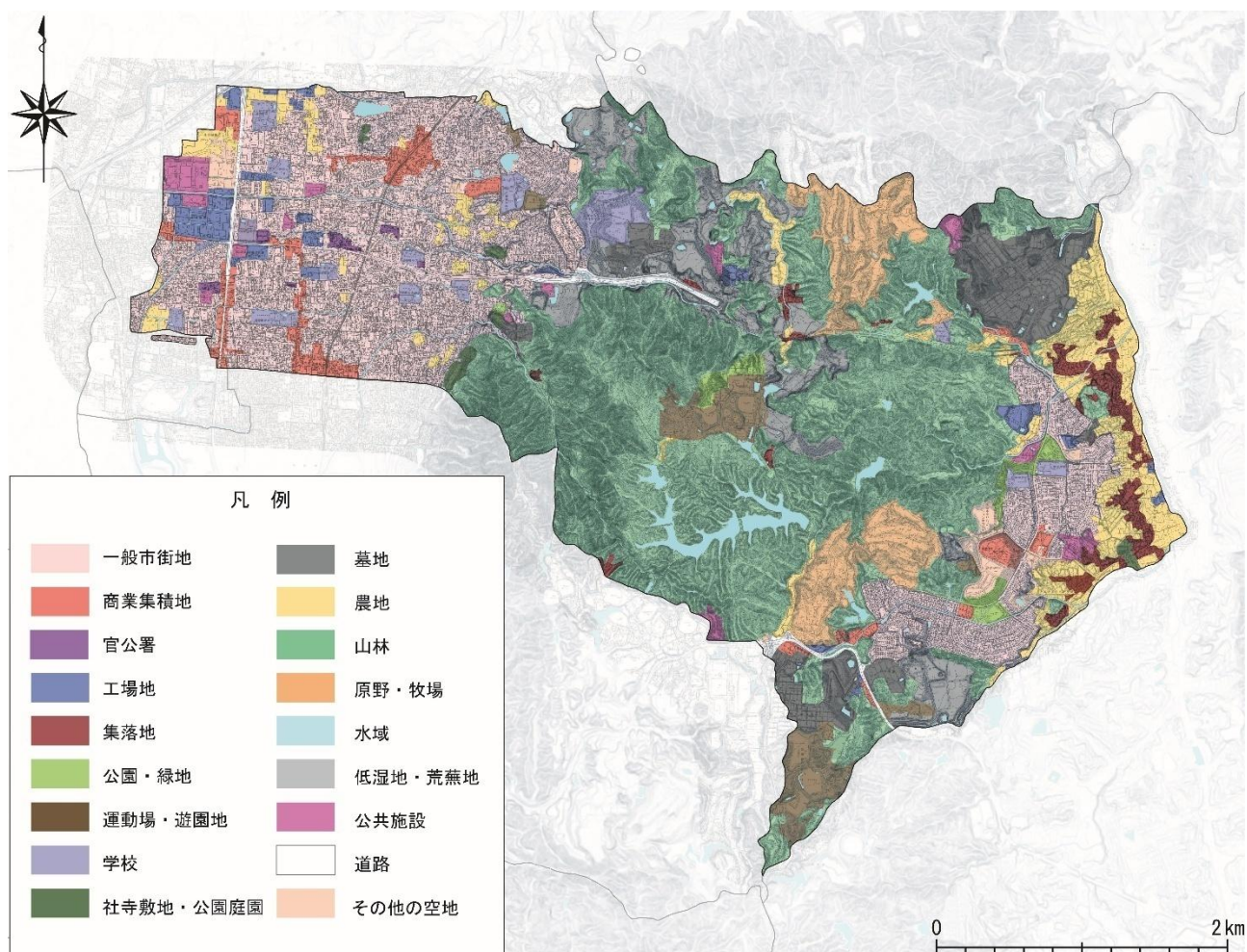


図 1-17 四條畷市の土地利用状況図（平成 22 年）
（四條畷市土地利用現況図（平成 22 年）を基に作成）

（６）産業

本市の産業は、四條畷市産業振興ビジョンによると、JR 四条畷駅、忍ヶ丘駅に位置する商店街を中心とした「商業」、東西南北に走る道路網など交通アクセスの良さに恵まれた環境下での「工業」、東部地域を中心に水稻などの栽培がおこなわれ、市の特産品「エコ河内田原米」を育む「農業」が共存しています。中小企業や個人事業主が多いことから、各分野に共通して高齢化等による後継者の確保や人材の育成などの課題を抱えています。

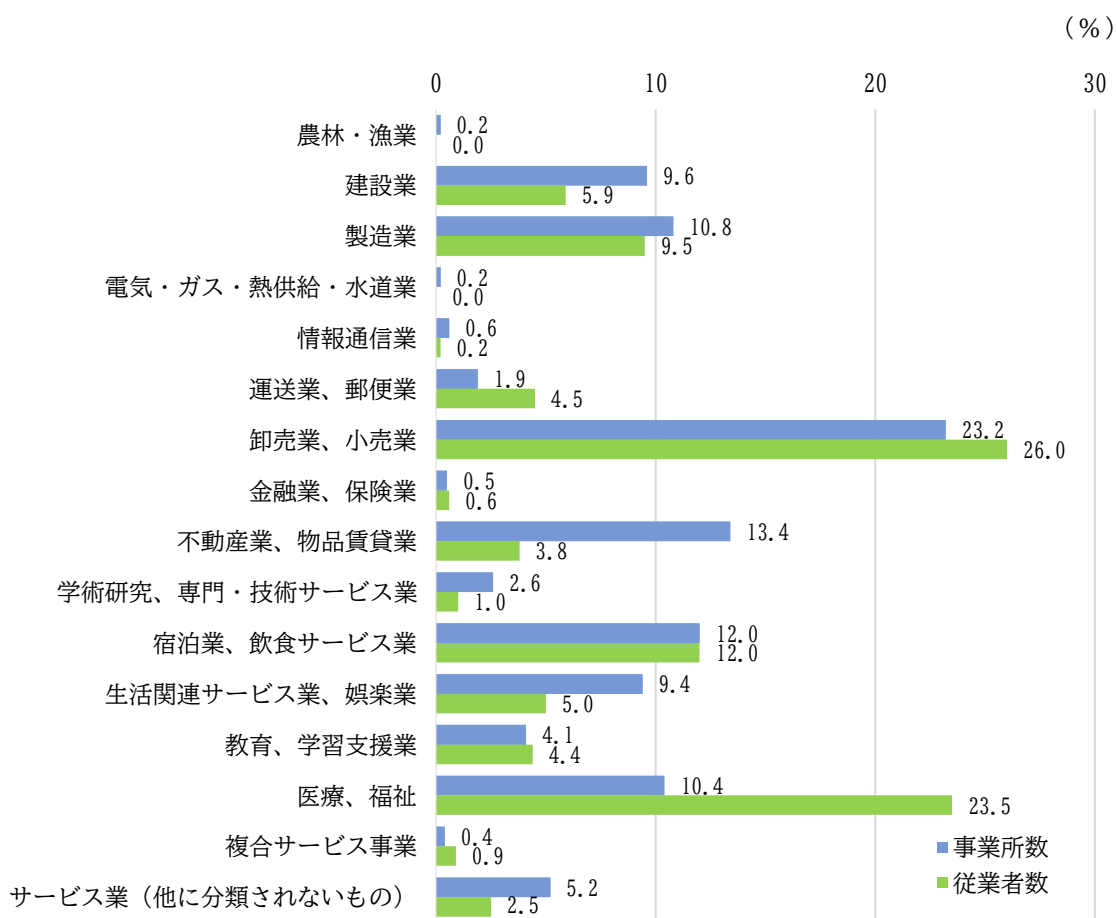


図 1-18 四條畷市の産業（令和 3 年（2021））
（経済センサス活動調査を基に作成）

（７）文化財関連施設

本市の文化財関連施設は、次の 5 つの施設で修復、保管、展示等を行っています。すべて本市の歴史を語るには欠かせない施設です。

①四條畷市立歴史民俗資料館（塚脇町 3-7）

市内遺跡から出土した埋蔵文化財や、往時の暮らしを伝える民俗資料を収蔵及び展示する本市の歴史文化の発信拠点であり、「民俗資料展示室」と「埋蔵文

化財展示室」の二つの展示室で構成された施設です。「民俗資料展示室」は明治時代の土蔵を利活用した国登録有形文化財であり、建物そのものが歴史的価値を有しています。一方、「埋蔵文化財展示室」はイラストなどを用いて、郷土の歴史を分かりやすく紐解いています。定期的に特別展を実施するなど文化財の保存・活用と生涯学習の架け橋となる役割を担っています。



図 1-19 四條畷市立
歴史民俗資料館

②四條畷市立市民活動センター（北出町 3-1）

施設の一部を利用し、市内遺跡から出土した埋蔵文化財の復元、修復作業を行い、復元した埋蔵文化財を保存しています。また、市史の編さんや市民から寄贈された資料の保管も行います。



図 1-20 千光寺跡移築広場

③千光寺跡移築広場（田原台 7 丁目 10）

平成 6 年（1994）の発掘調査で発掘された千光寺跡の土塀、墓地、納骨施設などの重要な部分を土ごと切り取って移築した施設です。



図 1-21 なわて水みらい
センター

④（仮称）正法寺跡遺跡広場（清瀧 396）

飛鳥時代から中世の寺跡にある正法寺跡の一部を遺跡広場として今後公開する予定の施設です。

⑤なわて水みらいセンター

（上部利用・蔀屋北遺跡）（砂 4 丁目 1-13）

大阪府の下水処理施設の上部を利用し、施設建設に伴って出土した馬の全身骨格のレプリカを管理事務所展示スペースに設置公開しています。また、重要資料の出土した場所近くにも説明板を設置公開しています。

(8) 学校

本市は、西部地域5校、東部地域1校の計6校の小学校、西部地域2校、東部地域1校の計3校の中学校があります。「総合的な学習の時間」などを活用した郷土学習により郷土愛を育むとともに、本市の次なる歴史の継承者として、適宜出前授業を実施し、加えて下記の学年で毎年体験学習を実施しています。

①小学校第3学年（希望校のみ）

暇古文化研究保存会の協力のもと、歴史民俗資料館にて実際に使用していた道具を用いながら昔の生活を考えたり、実際の民俗資料の見学を行う。

②小学校第6学年（希望校のみ）

歴史民俗資料館にて、市内から出土した考古資料を活用し、当時の土器に触れ、道具の使い方を学習する。

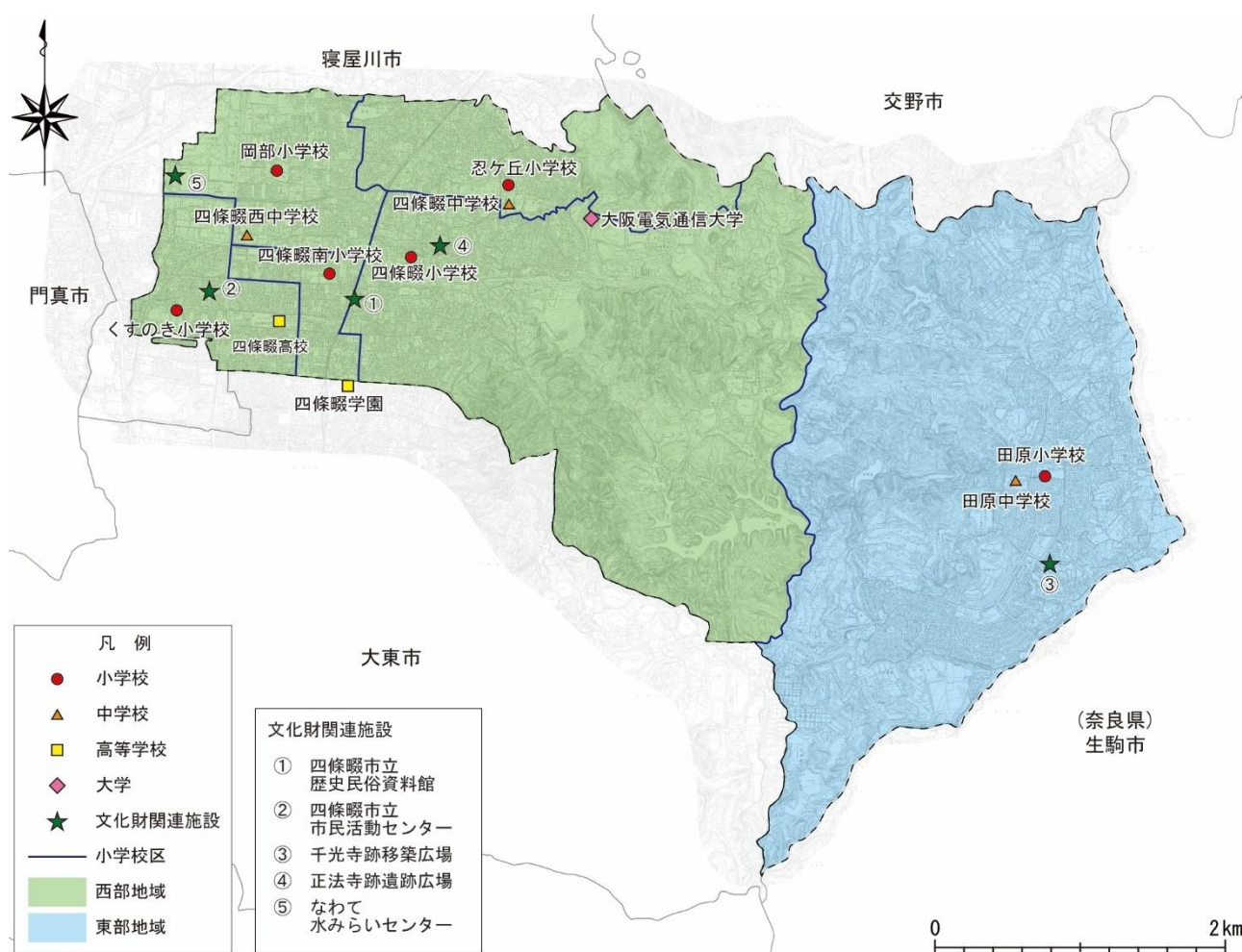


図 1-22 四條畷市内の学校と文化財関連施設の分布図

3 歴史的背景

(1) 旧石器時代

西部地域は、古来水域が広がり平野部が狭く山岳が迫っているため、狭い範囲に旧石器時代に始まる数多くの遺跡が所在し、東部地域は田原盆地に縄文時代からの遺跡が所在します。市域における最古の人間活動の痕跡は、旧石器時代から確認されており、西部地域の河岸段丘上で当時の石器が出土しました。

(2) 縄文時代

12000 年前になると気候が温暖になり、河内湾が形成されました。草創期の石器（有茎尖頭器）が西部地域の河岸段丘上で出土しています。土器や弓矢が出現し定住生活が始まり、東部地域の盆地に早期の集落がありました。西部地域の河岸段丘上では中期から晩期に集落が点在し、土偶などの祭祀用品、土器類や多量の石器類が出土し、河内湾の海産物と生駒山系の動植物を食料として利用し豊かに生活していました。また、北陸の大型彫刻石棒、ヒスイ製大珠の出土から、水上交通などによる多様な文化交流があったことがわかります。



図 1-23 ヒスイ製大珠

(3) 弥生時代

弥生時代に河内湾が汽水化し、河内潟に縮小したことに伴い、水辺に生活の痕跡が認められます。

河内潟岸の低地では、縄文晩期の突帯文土器とともに弥生前期初頭の土器や炭化米が出土しており、近畿地方で最も古く稲作が始まったことがわかります。雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く河内潟岸の集落で、竪穴建物跡や方形周溝墓群が確認されています。前期から後期までほぼ同一地に集落が継続するのは淀川南岸から河内潟北岸において珍しく、河内潟岸において瀬戸内海を介し西日本との交流を行う上で都合のいい立地であったことと関わりがあります。



図 1-24 雁屋遺跡出土
人骨（四條畷市指定文化財）

（４）古墳時代

古墳時代に、河内潟は淡水湖の河内湖になりました。忍岡古墳は、前期中頃（３世紀末から４世紀初頭）に築造されました。全長約 87m の前方後円墳で、河内湖を介した交通を掌握した有力首長の墓です。

古墳時代の四條畷の特徴は、５、６世紀に渡来系の人々が多く居住して西部地域で広範に馬飼いが行われていたことです。当時の地形は東に山、西に湖があり、さらに東西に流れる河川で区切られており、馬が逃げるできない天然の牧場でした。市域の馬飼いのあり方は、次のように復元できます。河内湖から生駒山系へと続く標高差のある地形の中で、最も低い土地に馬を陸揚げする港とそれに伴う集落（葦屋北遺跡）がありました。やや標高の高くなった平坦地に、集落（中野遺跡・岡山南遺跡など）および祭祀域（奈良井遺跡・鎌田遺跡）があり、山裾の高所部に墓所である古墳群（清滝古墳群・大上古墳群）が造られました。中野にある墓ノ堂古墳は古墳時代後期初頭（６世紀初頭）に造られた墳長約 70m の前方後円墳です。立て並べられた埴輪の中に馬や馬飼い人物が含まれており、葬られたのは付近の流通を掌握し馬飼いを統率していた人物でした。当時の西部地域は、立地により馬飼いに必要な役割を分担した大きな一つの馬飼い遺跡群でした。



図 1-25 南山下遺跡出土
馬形埴輪（四條畷市指定文化財）

（５）飛鳥・奈良・平安時代

律令制が確立していく古代、本市は東部地域が交野郡、西部地域が讃良郡に属しました。690 年に即位した持統天皇は幼名が^{うののさららのひめみこ}鸕野讃良皇女であり、讃良郡の豪族と関わりがありました。市域には 7 世紀に創建された寺院跡が 2 箇所あります。正法寺跡は中門、塔、講堂などの存在が確認されており、創建当時の掘立柱建物跡や、平安時代の石積みと瓦積みの



図 1-26 土馬を使った祭祀

基壇建物を検出しています。讃良寺跡も同時期で、出土した正法寺跡と同範の軒丸瓦の状態から、讃良寺の瓦が後に作られたものとわかります。先に正法寺が創建さ

れ、その後讃良寺が創建されました。寺院周辺に飛鳥から奈良時代の集落があり、河川で土馬を使った祭祀が行われました。

本市を東西に横断する清滝街道は、奈良時代に行基によって開かれたとされます。西部地域では奈良時代に条里制が施行され、発掘調査で地割が検出されています。その地割が残る低地で小型の銅鏡が出土し、有力者が水にかかわる祭祀に用いたとみられます。『続日本紀』に田原鑄銭長官の任官記事があり、東部地域周辺に銅銭を造る鑄銭司がありました。墾田永年私財法の発布により荘園開発が始まり、西部地域に法隆寺の所領がありました。

長岡京、平安京への遷都以降、南海道が市域を南北に縦断するようになりました。この道は高野山への参詣のための東高野街道となりました。街道の開通により交通が活発となり、街道沿いを中心に複数の集落が営まれました。『延喜式』神名帳に記載される式内社として御机神社、国中神社、忍陵神社（式内社である津杵神社に、大將軍社と馬守神社が合祀され、明治44年（1911）に改称）が挙げられます。『延喜式』に讃良郡に氷室があると記載され、室池の名称は氷室にちなみます。荘園の開発が進み、東部地域の「田原庄」は高倉天皇との間に後鳥羽天皇を産んだ七条院の所領でした。

（6）鎌倉・南北朝時代

鎌倉幕府が武家政権を確立した承久の乱で、後鳥羽天皇を擁する朝廷側の中心武将だった藤原秀康は西部地域にあった讃良荘の預所職で、『承久三年四年日次記』によれば乱後に河内国讃良郡で捕縛されました。

鎌倉時代の集落は平安時代から引き続き、街道沿いを中心に複数営まれました。岡山の丘陵上には鍛冶炉・金床石を伴う鍛冶



図 1-27 四條畷の戦い

工房がありました。また清滝街道を西部地域から清滝峠へと登る途中では、木樋を伴う溜池が構築され、街道沿いの斜面には窯が築かれ瓦器が生産されました。

南北朝時代の1348年（貞和4年、正平3年）に「四條畷の戦い」で飯盛山麓一帯において北朝の高師直軍と南朝の楠木正行軍が戦いました。市域にその際戦死した

楠木正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定史跡です。清滝街道沿いにある逢阪石造五輪塔は南朝が用いた「延元」の年号が確認できます。逢阪は清滝街道沿い集落として栄え「逢阪千軒」と呼ばれました。

（7）室町・戦国時代

16 世紀に生駒山地の支脈である飯盛山の山頂に飯盛城が築されました。飯盛城は木沢長政の居城として文献上はじめて登場します。城主は交野郡出身の安見宗房を経て阿波出身の武将三好長慶が永禄 3 年(1560)に居城とし、三好政権の政治・文化の中心として機能しました。飯盛城は長慶の後を継いだ三好義継が若江城に移った永禄 12 年(1569)頃まで城としての機能を保ちました。

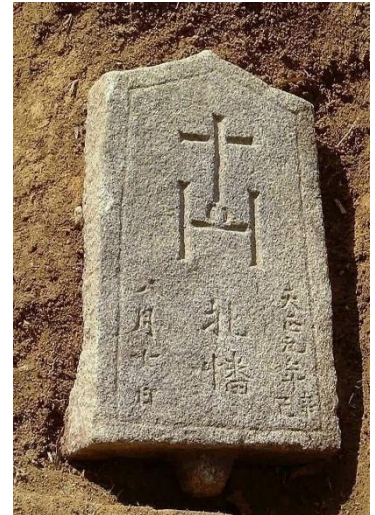


図 1-28 千光寺跡出土
キリシタン墓碑
(大阪府指定文化財)

三好長慶が保護した河内キリシタンの一人である田原城主田原礼幡(レイマン)のキリシタン墓碑(天正 9 年銘)が、城主一族の菩提寺である田原の千光寺跡で土堀の脇の穴に隠された状態で出土しています。市域には田原、砂、岡山などに多くのキリシタンが存在しましたが、豊臣秀吉の禁教令以降弾圧されました。

16 世紀中頃、讃良郡条里遺跡内に大將軍社が創建され、明治 44 年(1911)に式内社の忍陵神社に合祀されるまで地域の尊崇を集めました。発掘調査で御正躰あるいは奉納されたとみられる柴垣柳樹双鳥鏡が出土したほか、近世から近代に属する大量の灯明皿は、文献に記録されていた「百灯明」の祭りで使われたものです。

（8）江戸時代

慶長 20 年(1615)の大坂夏の陣で、2 代将軍である徳川秀忠が忍岡丘陵に陣を敷きました。

三好長慶の傍系にあたる三好為三は寛永 2 年(1625)に徳川秀忠から市域の一部である「南甲可村」を与えられ、その子孫が旗本として幕末まで南野村(南野)を治めました。現在も南野の正願寺の山門には三好家の家紋である三階菱の瓦が葺かれ

ています。幕末に旗本三好家領の主要村落として南野村に代官所が置られました。代官屋敷は『天保検地帳』から現在の雁屋南町に設けられました。

もとは一つの村だった中野村三郷（本郷（中野）、上郷（清滝）、逢坂郷（逢阪））と、蔀屋村（蔀屋）は、寛永 10 年(1633)から旗本久貝家が領し、幕末まで続きました。

元和 4 年（1618）に成立した岡山村（岡山）、砂西村・砂東村（砂）と、慶安 4 年（1651）に成立した上田原村（上田原）、下田原村（下田原）は、幕府直轄の天領や、大坂町奉行役知、高槻藩預所などを経て幕末には京都守護職役知でした。

この時代、南北を結ぶ街道として河内街道が新たに開かれ、東高野街道と共に多くの人が市域を往来するようになりました。明和年間から秋祭りのだんじり曳行が始まり、幕末までに上田原、岡山、清滝と、南野に 7 台のだんじりがありました。市域では河内木綿や菜種油が盛んにつくられ、権現川や清滝川に水車が築かれ製粉などに利用されました。寝屋川筋は舟運業が栄え、市域の蔀屋と雁屋に浜（河港）が形成されました。室池には干害を防ぐ目的で安政 5 年（1858）新たに新池が造られました。



図 1-29 寝屋川筋の舟運業

（9）明治以降

明治初頭は河内県、堺県に属し、明治 14 年（1881）に大阪府の管轄となりました。明治 21 年(1888)に公布された町村制により、明治 22 年(1889)に甲可村と田原村が成立しました。明治 23 年(1890)に、四條畷神社が楠木正行を主神として創建されました。明治 28 年(1895)に片町－四條畷間に鉄道が開業し、交通条件が大きく改善されました。明治 35 年（1902）に清滝街道が修築されて甲可村と田原村を結

び、国道 163 号旧道の原型となりました。さらに、明治 36 年(1903)に北河内地域初の府立中学校として府立四條畷中学校（現府立四條畷高等学校）が開校しました。

明治から大正時代にかけては、権現川、清滝川流域を中心に水車を用いた製粉業が盛んとなりました。田原村には明治後期に綿織物工場ができ、綾木綿などが生産されました。また、砂、岡山を中心に金網製造が主要産業となり、大正 14 年(1925)に全国の金網生産の 4 割を市域が占めていました。四條畷神社の門前町は市域最大の商業集積地として栄えました。室池周辺の天然氷は明治時代にも切り出されていました。舟運業は鉄道開通後も、昭和初期に貨物自動車が出現するまで盛んでした。

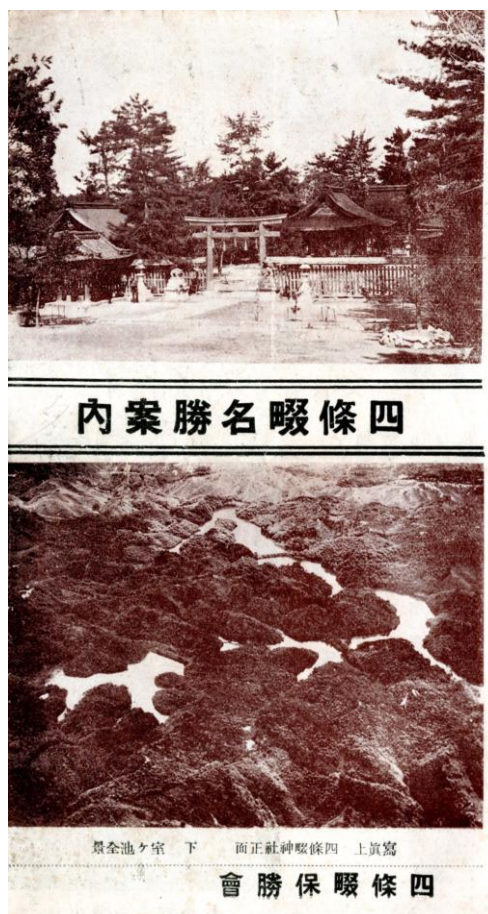


図 1-30 昭和初期パンフレット
(個人蔵)

明治から昭和時代にかけて、四條畷神社への参詣が盛んとなり、年間 30 万人が訪れました。周辺観光の案内パンフレットは、市域を「関西の軽井沢」と宣伝し、飯盛山上には昭和 5 年(1930)に「飯盛山上遊園地」が開園しました。

駅、中学校に加え、警察署、郵便局も「四條畷」と称するようになり、「四條畷」を冠する公共施設が増加しました。こうした状況を背景として、昭和 7 年(1932)に甲可村は「歴史上有名なる」名称として四條畷村に改称しました。

昭和 22 年(1947)に四條畷村が町制施行して四條畷町となりました。昭和 35 年(1960)に四條畷町と田原村を結ぶバス路線が開通し、昭和 36 年(1961)に四條畷町と田原村が合併しました。この間に国鉄忍ヶ丘駅の開設、上水道の整備など生活基盤の充実が図られました。昭和 30 年代の後半から市域の南部を中心として住宅開発が進み、人口増加の兆しがみえはじめ、生駒山地の土砂採取も始まり、山の様相が大きく変化しました。昭和 40 年代には、都市圏の拡大による急速な都市化が進み、国鉄片町線が昭和 44 年(1969)に四條畷駅まで複線化しました。昭和 45 年(1970)に府内 30 番目の市として市制施行して四條畷市が発足し、現在に至ります。